大滝山の哺乳類

県内では、これまで36種の哺乳類が確認されているが、そのうち大滝山では、19種の生息が確認されており、このほかに4種が生息すると推測されている。大滝山は、県内の半数以上の哺乳類が生息する県内有数の山なのである。

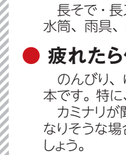
【大滝山の哺乳類】確認されている種／ジネズミ、ヒミズ、アズマモグラ、コウベモグラ、ニホンザル、ノウサギ、ニホンリス、ムササビ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、タヌキ、アナグマ、ニホンイタチ、テン、ハクビシン、ニホンジカ、イノシシ　**生息していると推定される種**／ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、キツネ

県内のほとんどの哺乳類は森林に生息する。大滝山の豊かな山林が多くの哺乳類の大切な生息環境となり、希少種が多数記録されている。しかし、種によって大滝山に住み着いた背景は異なるようである。例えば、アナグマは、1960年代までは、県内の山地に広く分布していたが、近年は生息数が減少しており、現在は調岐山脈や平野部の丘陵地に点在し、生息地が縮小している。一方、ニホンイタチは、沿岸部や讃岐山脈で記録されるが、外来種のチョウセンイタチは讃岐平野で見つかっている。これは、チョウセンイタチの生息分布の拡大が、ニホンイタチを追い詰めているからだという意見もあるが、定かは解明されていない。また、大滝山ではアズマモグラとコウベモグラの2種が記録されているが、コウベモグラは平地を中心に広く分布している。これに対して、アズマモグラは個体数も少なく標高の限られた地域にしか生息しないアズマモグラがコウベモグラとすみわけているからか、まだ解明されていない。

このようなことから大滝山は、希少な山地性哺乳類の重要な生息環境であり、何らかの事情で追い詰められている種にとっては駆け込み寺であるとも言えよう。

写真鑑定できない哺乳類とは!?

哺乳類は、警戒心が強く、野外で出会うのは難しい。そのため、調査はおもに自動撮影装置を用いる。アナグマとタヌキ見間違えられるが、特徴を見れば区別できる。しかし、ニホンイタチとチョウセンイタチは両種の間でも雌雄の間でも大きさが異なり、写真判定だけでは区別できず、種の同定には標本の計測が必要である。アズマモグラとコウベモグラでも外部計測と頭骨標本で区別するが、このことはあまり知られていない。このように、似た種の調査は、研究者の地道な活動に支えられているのだ。



【ニホンカゲを咥えたイタチの一種】

イタチの種類は写真では決められない(外部の測定データやDNAが必要)。

大滝山の鳥類

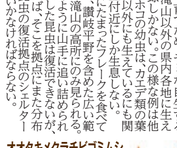
県内では、これまで約300種の鳥類が確認されており、そのうち、大滝山とその周辺ではその3分の1にあたる約100種の生息が確認されている。また大滝山は県立自然公園や鳥獣保護区として守られているため、多くの鳥類の安息の地となっている。一方、ほとんどが山林であるため、水鳥や草原性の種類は少なく、多くの森林性の鳥類の繁殖地となっている。

ほとんどが森林のため、大滝山は多くの森林性の種類が観察できることをオススメしたい。観察場所としては、県民いこいの森から山頂部にかけての自然林が残っているポイントを中心に見て回るのが良い。よく観察できる留鳥や渡り鳥を以下に記した。春と秋の渡りの時期には、見晴らしの良い尾根沿いの観察がオススメだ。サシバ、ハイタカ、オオタカ、ツミ、ハチクマ、ノスリなどのタカ類やアマツバメ、ハリオアマツバメ、イワツバメなどのツバメ類が飛翔している。運が良ければ、コゲラ、キビタキ、エゾビタキ、ムギマキなども見られる。

留鳥	アオゲラ、コゲラ、トラツグミ、ヤマドリ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、エナガ、ヒヨドリ、ホオジロ、ウグイス、カワガラス、キセキレイ、ミソサザイ、トビ、フクロウ、オオコノハズク、ゴジュウカラ、キジバト、カケス、カワラヒワなど
夏鳥	オオルリ、キビタキ、コサメビタキ、クロツグミ、サンコウチョウ、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチ、カッコウ、センダイムシクイ、ヤブサメなど
冬鳥	カヤクグリ、ウソ、クロジ、アオジ、カシラダカ、アトリ、マヒワ、キクイタダキ、シロハラ、ツグミ、シメ、ルリビタキ、ミヤマホオジロ、ベニマシコ、ジョウビタキ、ビンズイ、ヒレンジャク、キレンジャク、ノスリ、ハイタカなど

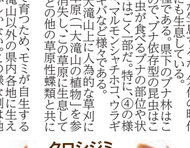
ドングリを食べる鳥類

シイ類やカシ類の堅果（ドングリ）は栄養価が高いためさまざまな哺乳類や昆虫の食料となっており、鳥類にもドングリを食べるものが多い。大滝山ではヤマガラとカケスがよく見られ、どちらもドングリを運んで隠し、後で食べる習性（貯食行動）が観察される。ヤマガラは主に木の幹や樹皮のすき間や割れ目など樹上に隠し、カケスは樹上と地面の両方に隠す。この他にカモの仲間で、大滝山周辺の森林に囲まれた水辺で見られるオシドリもドングリを食べる。食べ方は地面のドングリだけでなく、池に落ちたドングリも探して食べるが、貯食活動はしない。ドングリを食べる鳥類の食事作法は一様ではないようだ。



カケス

分布
アフリカ大陸北部、ユーラシア大陸中部・南部、日本
大きさ
全長 33cm　翼開長 50cm



オシドリ

分布
東アジア（ロシア南東部、中国、朝鮮半島、日本、台湾）
大きさ
全長 41~48cm　翼開長 68~74cm

大滝山の昆虫

大滝山は山麓から山頂にかけて植生が大きく変わるため、植物と関係の深い昆虫類も多様な地域となっている。中には大滝山の固有種や県内ではここでしか見られない種も生息し、昆虫類にとって非常に重要な生息環境となっている。

昆虫から大滝山の価値を考える

大滝山の昆虫は種数が大変多く、希少な種も少なからず含まれている。この山の特徴を知るうえで、代表的な昆虫を挙げてみた。

分布	和名	備考(生息地が限定される理由など)
世界で大滝山にしかいない昆虫	①オオタキサンオオコバネナガハネカクシ ②クビレオオズナガゴミムシ	●大滝山で独自に進化した
香川県で大滝山にしか記録のない昆虫	③ヨコヤマヒゲナガカミキリ	●幼虫は、ブナの根際の幹(生木)を食べる
	④ブナアオシャチホコ など	●幼虫は、ブナの葉を食べる
	⑤ブナヒメシンクイ	●幼虫は、ブナの実を食べる
	⑥オニクワガタ	●幼虫は、ブナの朽木を食べる
	⑦クロシジミ	●大滝山上の草原の消失と共に、1959年に姿を消した
	⑧トゲブタオオタマムシ	●幼虫は、モミの枯れ枝を食べる
県内に広く分布していたが、現在は大滝山にしかいない昆虫	⑨クロカナブン	(分布域の減少理由は不明)

①～⑧は、古い時代に大滝山に飛来して、住み着いた祖先の有翅種に由来する。①は、①の地下で暮らすようになり、羽が退化した結果、大滝山固有種やオオタキクラチビゴミムシなどの仲間に分化した昆虫である。この他に、同じく県固有種や縮小傾向にある。つまり、これまでのガイドマップ1～3で紹介してきた屋島、寒霞渓、琴平山は侵食によって削れ残った山であり、これから縮小していく運命にあるのに対し、大滝山は逆に成長を続けている山なのである。

ちなみに、讃岐山脈は四国山地と共に、夏に太平洋から吹き込む湿った季節風をさえぎるため、香川県は乾燥した気候（瀬戸内式気候）となり、香川で独特の生物相を育む要因となっている。その一方で、県内のほとんどの河川の源は讃岐山脈にあり、乾燥した香川県において、多くの水辺の生き物も育んでいる。このように、讃岐山脈は、白亜紀後期のタイムカプセルであると同時に、香川県の気候風土にとても大きな影響を与えている山なのである。

③～⑥は、ブナに依存するブナ依存型の昆虫である。県下のブナ林はこの頂上部にしか存在しないため、ブナ依存型の昆虫は、この様な小さな範囲でしか見られない。また、ブナ林は、昆虫が食べる葉や幹、樹液などの餌資源が豊富なため、ブナ林の昆虫は、ブナ以外の樹木に依存する昆虫に比べて種数が多い。

⑦は、草原性の蝶で、かつて大滝山上に人為的な草刈によって存在していたスキの草原（「大滝山の植物」を参照）に生息していたが、草原が消失し、この草原に生息していたオオウラギンヒョウモンなどの他の草原性蝶類と共に絶滅した。

⑧は、モミの枯れ枝を食べて育つため、モミが倒生する森林に生息する種。モミは大滝山以外の県内各地に生えているが、何故かこの山の記載例はない。この様な山にもありふれた昆虫が生息しないことは、大滝山の生態系の特異性を表している。

2年かけて成長するが、ごく一部の個体は1年で成虫になる。また、大滝山は、大滝山周辺の森林に囲まれた水辺で見られるオシドリもドングリを食べる。食べ方は地面のドングリだけでなく、池に落ちたドングリも探して食べるが、貯食活動はしない。ドングリを食べる鳥類の食事作法は一様ではないようだ。

オオタキメクラチビゴミムシ

分布
日本（香川県固有種）
大きさ
2.5~2.9mm

■採集日：1997年10月15日
高松市で採集された個体

クロシジミ

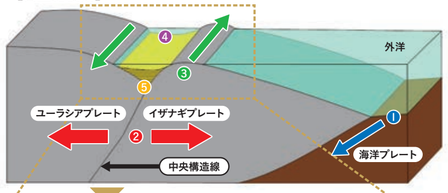
分布
日本（本州西部、四国）、朝鮮半島、中国
翅を広げた長さ
17~23mm

■採集日：1952年7月13日
大滝山で採集された個体

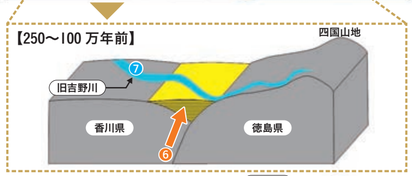
大滝山のなりたち

	地質時代	年代	図中の番号	大滝山が出来た経緯
1	白亜紀後期	7500万年前後	❶	海洋プレートの沈み込み運動の影響で、
			❷	地層にせん断力（ずれる力）が生じたため、
			❸	中央構造線が左横ずれ断層運動が始まった。
			❹	その際に細長い溝が沈降して、浅い海となった。
			❺	その海に砂や泥が堆積した。
2	古第三紀	6600万年前～	-	砂や泥は、一度、地下深くに埋もれて固まる（＝和泉層群）。
3	新第三紀	2300万年前～	❻	地殻変動によって、和泉層群が褶曲した後、隆起を始める。
4	第四紀	260万年前～現在	❼	徳島県の吉野川が現在の讃岐山脈を通過し香川県に広く流れ込んでいた。
			❽	中央構造線の活動（右横ずれ）に伴って讃岐山脈が隆起。その後も隆起が続き、現在の大滝山となる。

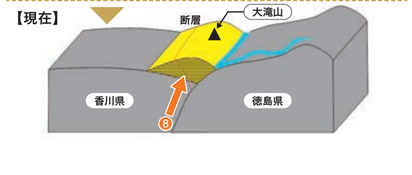
【白亜紀後期】



【250～100万年前】



【現在】



大滝山は和泉層群と呼ばれる地層からできており、アンモナイト、イノセラムス、ウミガメ、サメなどの化石が見つかっている。つまり、むかし大滝山は海底だったのだ。

むかしの大滝山は、海の底だった!

大滝山を含む讃岐山脈は、表に記したように、太古の海に降り積もった砂や泥が固まってできた地層（和泉層群）でできている。そのため、この太古の海に生息していた色々な海生生物の化石が見つかっている。これらの化石は海の生き物の死骸が泥と一緒に埋もれて、気の遠くなるほどの時間をかけて化石となったものである。

メタプラセンティセラス（アンモナイト）
高松市塩江町塩江産
井内昌樹氏 所蔵

モササウルス類の下顎
さぬき市多和兼割館
きしわだ自然資料館所蔵

成長を続ける大滝山

海の底で誕生した大滝山のもとになる地層は、隆起を続け、現在の標高は946メートルに達し、讃岐山脈の中では3番目に高い山へと成長した。国土地理院のGPS観測では現在もわずかに隆起傾向にある。つまり、これまでのガイドマップ1～3で紹介してきた屋島、寒霞渓、琴平山は侵食によって削れ残った山であり、これから縮小していく運命にあるのに対し、大滝山は逆に成長を続けている山なのである。

ちなみに、讃岐山脈は四国山地と共に、夏に太平洋から吹き込む湿った季節風をさえぎるため、香川県は乾燥した気候（瀬戸内式気候）となり、香川で独特の生物相を育む要因となっている。その一方で、県内のほとんどの河川の源は讃岐山脈にあり、乾燥した香川県において、多くの水辺の生き物も育んでいる。このように、讃岐山脈は、白亜紀後期のタイムカプセルであると同時に、香川県の気候風土にとても大きな影響を与えている山なのである。

大滝山 の植物

大滝山は香川県南部の讃岐山脈のほぼ中央部にあり、標高が946m で、頂上部付近には尾根沿いに県内唯一のブナ林が見られる。大滝山のブナ林では、ブナをはじめとする冷温帯特有の植物が数多く見られる。

ブナ

ツガ

コハウチワカエデ

大滝山の植物のみどころ

日本のように雨の多い国では、植物の生育は気温に大きく左右される。香川県のような西日本の低地では気温が高く、人が手を加えなければ、シイやカシ類などからなる常緑広葉樹の暖温帯林が成立する。大滝山の麓にある香日神社のアカガシ林や山ノ神神社のウラジロガシ林からは、暖温帯林のなごりを見ることができる。標高が高くなり気温が低くなると、やがて、ブナを中心とした落葉広葉樹の冷温帯林が成立する。香川県では、およそ標高790m以上になると、冷温帯林が成立する気候条件となると推定されているが、大滝山のほか、讃岐山脈沿いの雌王山、大川山、雲辺寺山などの山頂や尾根沿いのわずかな範囲に過ぎない。また、多くの地域では人の手が加わり、植林地や二次林となっているが、ブナ林やケヤキ林のように自然の林が残っているところでは、下の表にあげたような、この地域特有の植物が多く生育している。大滝山の尾根沿いのブナ林では、早春から初夏にかけて次々と花を咲かせる。けれども、標高の低い山の多い香川県では、このような冷温帯特有の植物は地球温暖化が進行すると、行き場を失い絶滅してしまうことになる。

【大滝山など、讃岐山脈の冷温帯を中心に生育する植物の例】

■木本植物　ツガ、ミヤマハハソ、ミヤマザクラ、ナンキンナナカマド、クロウメモドキ、エゾノミネ、ブナ、イヌブナ、ミズメ、アサダ、ヤマネコヤナギ、オノエヤナギ、カジカエデ、オオモミジ、テツカエデ、イタヤカエデ、コハウチワカエデ、トチノキ、ヤマボウシ、ヤハズアジサイ、ハクウンボク、アサガラ、ベニドウダン、ホンシャクナゲ、ツクシシャクナゲ、シロバナウンゼンツツジ、アクシバ、ケアオダモ、ツクシトネリコ、フジウツギ、ヤマシグレ など

■草本植物　オシャグジデンダ、アオテンナンショウ、ツクバネソウ、ホウチャクソウ、チゴユリ、キバナノショウキラン、ウタスゲ、タマツリスゲ、オオタマツリスゲ、アズマスゲ、ニリンソウ、ユキワリイチゲ、オオバショウマ、サラシナショウマ、コモヤマカタバミ、ヒゴスミレ、オオタチツボスミレ、アケボノスミレ、ミヤマハコベ、イナモリソウ、イケマ、サワルリソウ、テンニンソウ、タカクマヒキオコシ、キバナアキギリ、ハナタツナミソウ、ヤマウツボ、シコクヤマコネオ、ソバナ、クサヤツデ、テイショウソウ、イシヅチウスバアザミ、ヨツバヒヨドリ、オオダイトウヒレン、ヒメチドメ、ミヤマチドメ など

コミヤマカタバミ

ホウチャクソウ

ユキワリイチゲ

ヤマウツボ

大滝山の陸貝

県内では140種のカタツムリの仲間（以下、「陸貝」という。）が生息している。大滝山にはそのうちの約半数（約48%）の67種が生息している。この生息する種類数は琴平山とトップを争い、他に匹敵する地域は無いまた、四国固有の種や、大滝山が分布域の端になっている種などが生息し、生物地理学的にも重要な地域となっている。

カタツムリの終着駅!?

陸貝のほとんどは、森林に生息し、植物や菌類、キノコや落ち葉に付着した細菌などを食べて暮らしている。種によっては餌とする植物や、落ち葉の好みが異なるために、多種多様な植物が生えている場所ほど、陸貝の種が多く生息する傾向にある。また、餌となる菌類は湿度の高い場所で増えやすいので、陸貝も比例してそのような場所に多くみられる。大滝山は県内で最も植物の種類が多く、降雨も低地に比べて多いため、陸貝にとって最も暮らしやすい場所となっている。

また、世界で四国にしか生息しない種も含まれており、特にコウツムシオイガイ、トサオビマイマイ、アワクリイロベッコウは四国固有種であるだけでなく、大滝山が分布域の端となっている。さらに、九州から四国にかけて分布する植物群の分布型の一つ「襲速紀（ソハヤキ）要素型分布」※に近い分布型をしているシマケシギセル、トサギセルの分布域の端にもなっている。つまり、なぜか大滝山が一部の陸貝の終着点となっており、そこから先へ分布を広げていないのだ。海から陸上へと進化・進出した貝の一部が、讃岐山脈で足止めとなっている理由を想像しながら、この歩みののろい生き物をじっくりと観察してみてはいかがだろうか。

※ **襲速紀（ソハヤキ）要素型分布とは**：①襲（そ）の国＝南九州と②速吸瀬戸（はやすいせと）＝大分県と愛媛県の間の豊予海峡、③紀（き）の国＝和歌山県と三重県南部の旧国名である『紀伊』の頭文字をとった地域、これらの地域では、『襲速紀要素の植物』と言われる日本固有の植物が多くみられる。

カガワゴマガイ

分布		
日本（四国）		
殻高	**殻径**	
約4mm	約2mm	

落葉広葉樹の生い茂る自然林に生息し、落ち葉の中に生息している。

オオギセル

分布		
日本（東京都以西~中国東部、四国）		
殻高	**殻径**	
約50mm	約10mm	

日本最大になるキセルガイ。大滝山では最大で40mmでは調行近に生息し、ブナの倒木や腐葉土の上で見つかる。

コウツムシオイガイ

分布		
日本（香川県、徳島県）		
殻高	**殻径**	
約1.5mm	約3.5mm	

落葉広葉樹林内の落ち葉の降り積もったガレ場に生息し、棲のすきまから見つかる。

大滝山の自然ガイドマップ4（第二版）

香川の自然ガイド

大滝山新聞

第二版

2022年（令和4年）3月25日

発行
香川県
〒760-8570
高松市番町四丁目1番10号
Tel 087-831-1111（代表）

企画・編集
NPO法人
みんなでつくる自然史博物館 香川
〒766-0202
仲多度郡まんのう町中通838
ことなみ未来館3F
Tel 070-4073-0989

賛助
公益財団法人
松平公益会
〒760-0030
高松市玉藻町4番10号

ご挨拶

大滝山は、標高が946mと県内で3番目に高い山として知られ、県下でも優れた自然環境を有する地域の一つです。山頂付近の稜線には県内唯一の貴重なブナの自然林が広がり、ブナ林でしか見ることのできない生き物たち生息・生育しています。また、讃岐山脈の緑豊かな山並みとその麓を流れる河川が調和して優れた自然景観を形成しています。

大滝山に残る自然は、香川県の貴重な財産であり、これらの自然を保護し、より良い状態で次の世代に引き継ぐとともに、野外レクリエーションや保健休養の場として、広く利用することを目的として、平成4年9月に、雲辺寺山、大川山などとともに、「大滝大川県立自然公園」として県内で初めて県立自然公園に指定されました。

このような大滝山の自然をより親しみ、楽しんでいただけるよう、このガイドマップを作成しました。

さあ、ガイドマップを片手に大滝山の自然を満喫してください。

参考文献一覧

【植物】❶香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №2 大滝大川県立自然公園地域の植生 香川県環境保健部環境自然保護課 47pp.❷香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №3 大滝大川県立自然公園地域の植物相 香川県環境保健部環境自然保護課 22pp.❸香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №4 大滝大川県立自然公園遊歩道コースの植物 香川県環境保健部環境自然保護課 15pp.【哺乳類】❹香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №6 大滝山・竜王山・大川山の哺乳類 香川県環境保健部環境自然保護課 6pp.❺川口重一（2006）香川県産Mustela属２種の事故死体の同定と分布. 哺乳類科学 46 (1): 35-39.❻徳島県立博物館（編）(2014) 四国の哺乳類 徳島県立博物館, 67pp.【鳥類】❼香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №12 大滝大川県立自然公園地域の陸産貝類 香川県環境保健部環境自然保護課 12pp.【昆虫類】❽香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観　自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №10 大滝大川県立自然公園地域の昆虫類 香川県環境保健部環境自然保護課 40pp.❾井木真人(1998) 香川県塩江町におけるウスバシロチョウの記録. へりべる19：40.❿喜多泰夫(2018) 香川県での蝶の採集の思い出. へりべる39：51-52.【植物】❶香川県環境保健部環境自然保護課（編）(1994) 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観 自然公園センター（仮称）展示計画基礎調査報告書 №1 讃岐山脈の地形及び地質 香川県環境保健部環境自然保護課, 28pp.

❷国土交通省ホームページ
（http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/ZOOMA/3710/index.html）

❸植木岳雪・清風大洋 (1998) 阿讃山地の植起過程　鮮新～更新統三豊層群を指標にして. 地質学雑誌 104 (4) 247-267.❹地水岳雪 (2001) 香川県中部, 阿讃山地北麓の三豊層群—その記載と鮮新世以降の北地塊の変遷—. 地学雑誌 110 (5) 708-724.【共通の文献】❶香川県環境自然保護課（編）(1988) 香川の自然ガイドブック　空と緑の散歩道. 香川県環境自然保護課, 235pp.❷香川県希少野生生物保護対策検討会（編）(2004) 香川レッドデータブック　香川県の希少野生生物. 香川県環境森林部環境・水政策課, 416pp.❸塩江町史編さん委員会（編）(1996) 新修　塩江町史. 塩江町, 555pp.❹特定非営利活動法人みんなでつくる自然史博物館・香川（編）(2021) 香川県レッドデータブック2020　香川県の希少野生生物. 香川県環境森林部　みどり保全課, 503pp.❺氏家由三（編）(1974) 香川の動植物. 高松市役所, 203pp.

写真提供者／資料提供者

猪木原 昌代／宇都宮 博博／川崎 克美／佐藤 明／末廣 喜代一／高木 眞人／多田 昭／豊島 立身／長尾 里孝／永嶋 寛之／林 政広／原 哲文／安宅 昌彦／井内 昌樹／川崎 勉／小林 真吾／篠原 望／長谷川 修一／増井 武彦／松本 慶一／谷地森 秀二／矢野 重文／吉本 幸夫／日本野鳥の会香川県支部

香川県
Kagawa Prefectural Government
〒760-0030 高松市玉藻町4番10号
■製作　助　公益財団法人 松平公益会
〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号
■企画・編集　NPO法人 みんなでつくる自然史博物館・香川
〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通838番地
事務局職員住所(ことなみ未来館内)
Tel 070-4073-0989
■製作　香川県環境森林部みどり保全課
Tel 087-832-3227 Fax 087-806-0225

JRでくるときの利用の方
最寄駅：JR高松駅
高松駅から約40分

自動車でくるときの利用の方
最寄IC：高松中央インターチェンジ
高松空港から約30分
※渋滞時は、遅くなる場合がございますのでご了承ください。

大滝大川県立自然公園センターまでの主な通行経路情報
JR高松駅から高松中央インターチェンジまで車で約20分
高松中央インターチェンジ（高松西IC）
高松市塩江支所
塩江温泉
塩江町役場
しおのえんかわらぶき館
塩江ふるさと館（ことなみ）
大滝大川県立自然公園センター
至 徳島↑
至 高松市街
N

アクセスマップ